

# 図書室月報

2022年(令和4年)2月5日

第705号

〈図書室のつどい 参加者の感想〉



## 神話は今も生きている

— 『世界の神様 解剖図鑑』を受講して—

津田 仁



神話という言葉は聞くと真先に思い浮かべるのはギリシャ神話と日本の古事記である。そしてそれに対する私のイメージは荒唐無稽でどこか遠い昔話のようにも聞こえる一方、「困ったときの神頼み」「神木」等々私達の暮らしの中に「神」という言葉が使われ続けているのはなぜかという素朴な疑問が残り、それを解くカギを今回の講座で見つけることが出来るのではないかと思いついた。

講師は國學院大學で神話学を専門に研究されている平藤喜久子先生。

講義内容はまず、神話が語る共通のテーマは、人間にとって普遍的な問いであり、多くは「はじまり」に関わる「創世神話」と英雄の活躍を語る「英雄神話」であること。神話学の対象と領域は、文学や歴史、宗教学、心理学、民俗学等多岐にわたる、神話を様々な角度から比較・対照したり、分析したりすることで、個別の文化の特徴や、その社会に属する人たちの物事に対する考え方を検討し人類の足跡や、人類に普遍的な思考、

観念について考察する学問であるとの説明があり、神話学の奥の深さに感心させられた。

次に、神話の世界は①自然の神 ②はじまりの神 ③恵みの神 ④動物・怪物・異形の神の4つに分類され、さらに自然の神は天の神、太陽の神等9つの神に、はじまりの神は世界をつくる神、火をもたらす神等9つの神に、恵みの神は竜を退治する神、英雄、恋愛の神等19の神に、動物・怪物・異形の神は鳥の神、犬・狼の神と怪物等15の神にそれぞれ分類されるなど、その神の多様さと数に驚いてしまった。

続いて比較神話学的見地から一つの事例として、火の始まりの神話について説明があった。始めに、人類と火の関わりについて、原人は火山の噴火や天然ガス、草木の自然発火による火を利用していったこと、北京原人の洞窟などで火が使用されていたことなどが説明された後、ギリシャ神話の火の起源はプロメテウスが人間に火の神を盗んで与えた話、南米のガラニ族の神話で魔法使いのハゲタカに占有

されていた火を神の子ニアンデルが火を木の中に入れて持ち帰り、人間たちが木と木をすり合わせればいつでも使えるようにした話、日本神話ではイザナミが火の神を出産し、その際に大やけどを負い、苦しみの中でさらに様々な神を発生させながら死んでいった話など、興味深い事例が説明された。

講義を受講して感じたことは、人類がこれ程多くの神を誕生させたのはそれだけ人類が森羅万象との関係の中で生きてきた証の結果でもあり、生み出された神話の一つ一つにはそこで生き、死んでいった人々、共同体の夢や畏怖などが祈りのごとく織り込まれているように思った。それはある意味人類の精神の歴史といえるかもしれない。

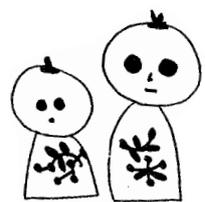
神話が今後も豊かな拡がりを持ちながら、人々の心に繋がっていくことを願いつつ、フランスの神話学者デュメジルの言葉を紹介して終わりとします。「神話を持たぬ民族がもしあれば、それは既に生命をなくした民族だというべきであろう」。

ブッククラブから

中島らも著

## 『今夜、すべてのバーで』の後に来るもの

武内法行



この本の帯には、「アル中小説のロングセラー」とあり、裏表紙にも「酒飲みに捧ぐアル中小説」との宣伝文句が記されている。これだけ見ると、酔っ払い人間への賛歌か、逆に酒で失敗した人の後悔記かのようなのである。いずれにせよ、下戸の私には関心のないことで、作者について何も知らず、何も期待せずに読んだ。講座の課題図書でなければ、手に取ることもなかったろう。

しかし、読み始めると印象が変わった。これは酔っ払い小説ではない。むしろクリアな頭脳の人の手記であり、「依存症」の問題に正面から向き合った作品である。しかも、アルコールのみならず、その体験から薬物も煙草も依存性という点では同等であるのに、酒類ばかりが世に野放しであると断じている。

この作品は主人公小島が重篤なアル中で入院するところから始まり、四十日後の退院日で終る。その間、治療に当たる医師や看護婦、同室の患者たち、事務所の部下さやか、お節介な患者の三婆ら、主人公を取り巻く種々の人間の言動が描かれる。

医師は当然アル中地獄から彼を再生させようとし、さやかも手荒に叱咤するが、同室の不良患者は、彼を再び中毒者に落そうとする。暇な三婆（松、竹、梅）は事ある毎に彼をおちよくる（からかう）。各人が個性的で、主人公とのやりとりが可笑しい。

講座の配布資料で、ここが池田市民病院であることを

知った。作者の体験通りなら一九八八年の秋で、何と私が大阪府池田市に住んでいた時のことである。正確には「市立池田病院」であろう。前の公園とは、「光明公園」の筈で、それを知ると作品がぐっと身近に感じられる。

池田市は大阪北西部の城下町で人口は約十萬、宝塚や神戸に近く、「大坂臭」は余りないハイカラな街である。住民の大阪弁も南部のようにきつくない。

作品の舞台は関西周辺と最初から感じていたが、関西弁の人が少ないのは、この土地柄と地域を特定したくない作者の意図のためだろう。それにしても、池田の病院なら看護婦や、まして大阪おはんの三婆が標準語風に話すのは少し変で、そのくせ「今時の」を「今日びの女の子は……」と関西式云い方をする。標準語の積りなのだろうか？

小島の言訳に激昂し、彼を打擲するさやかの罵言も、私には大阪弁のほうが自然なのと思えた。「何が心配するなや。あほ、しばかれて当然やろ」というように。

この作品のテーマは、「なぜ人は『依存症』になり、そこから抜けられないか」であろう。小島は、十八歳から三十五歳の入院前日まで大酒を飲み続け、遂に倒れてしまう。あと二、三日飲み続けたら、危なかったと主治医がいうほどの肝障害だったのである。

彼はこれ省みて、酒好きが高じてアル中になるのでなく、肉体と精神の沈痛の道具にアルコールを選ぶ者が中毒になるのだと云う。また現実というリアリティに

抗性のない人間がアルコールや薬物の中毒になると、自己への観察を述べている。

主治医赤河は彼の知力を認め、精神病理学書の内容を彼に説く。患者の性格分析や潜在的同性愛説、パーソナリティ障害説等々。しかし、それは小島にとってアル中地獄を脱する道筋にはならず、こんなもの科学ですかね、とその理論を駁す。

「依存」というのは、よほど人間の心身の深いところに根ざすものようだ。自身の生存と子孫を残すだけの動物は依存症とは無縁だから、これは肉体と精神を合せ持つ人間だけの「病氣」で、それだけに治癒困難なものに違いない。

依存は酒に限らず、ギャンブルやゲーム、また痴漢や盗撮等性的なものにも起こる。それらは見えない心の習性だけに規制や監視だけでは解決できず、当人の回心を導く指導と周りの見守りが必要なのだろう。

さやかは、父のアル中のため家庭が崩壊し、かつて小島の放蕩仲間だった兄も失い、今度は心寄せる小島も失いかけていく。どれもアルコール依存が原因である。それを知った小島は、退院を機に今度こそ酒を絶とうとしているようだ。

さやかとの退院祝いは、バーでのミルクによる乾杯である。果たして『今夜、すべてのバーで』の再生の見本となるか？ それはクエスチョンのまま、小説は終る。

新着図書から

<p>＜哲学 心理学 宗教＞</p> <p>「自由」の危機 藤原辰史ほか(集英社) 151</p> <p>＜歴史＞</p> <p>中国戦線ある日本人兵士の日記 小林太郎(新日本出版社) 210</p> <p>アフガニスタン史 前田耕作(河出書房新社) 227</p> <p>多摩・武蔵野凸凹地図 (昭文社) 291</p> <p>＜社会科学＞</p> <p>アフガニスタンを知らするための70章 前田耕作・編著(明石書店) 302</p> <p>ギフトエコノミー リーズル・クラーク(青土社) 331</p> <p>個人的なことは社会的なこと 貴戸理恵(青土社) 360</p> <p>「部落」は今どうなっているのか 丹波真理(部落問題研究所) 361</p> <p>ヴィクトリアン・アメリカのミソジニー 大井浩二(小鳥遊書房) 367</p> <p>二重に差別される女たち ミッキ・ケンダル(DU BOOKS) 367</p> <p>声をあげて、世界を変えよう! アドロー・スヴィタク(DU BOOKS) 367</p> <p>私はいま自由なの? リン・スタルスベルグ(柏書房) 367</p> <p>小さいのちのドアを開けて 永原郁子(いのちのこば社(フォレストブックス)) 367</p> <p>子どもを育てられるなんて思わなかった 古田大輔・編(山川出版社) 367</p> <p>ヤングケアラーを支える Nursing Todayブックレット編集部・編集 (日本看護協会出版会) 369</p> <p>沖繩と色川大吉 三木健・編(不二出版) 369</p> <p>教育は社会をどう変えたのか 桜井智恵子(明石書店) 371</p>	<p>教育の自律性と教育政治 荒井文昭(大月書店) 373</p> <p>あるヒトラーユーゲント団員の日記1928-1935 アンドレ・ポスタート編・著(白水社) 379</p> <p>「おとなの女」の自己教育思想 村田晶子(社会評論社) 379</p> <p>米兵はなぜ裁かれないのか 信夫隆司(みすず書房) 395</p> <p>＜自然科学＞</p> <p>発達障害サバイバルガイド 借金玉(ダイヤモンド社) 493</p> <p>刑務所の精神科医 野村俊明(みすず書房) 498</p> <p>＜工業＞</p> <p>北海道新聞が伝える核のごみ考えるヒント 関口裕士(北海道新聞社) 539</p> <p>伝えたい京の暮らし、京の味 松永佳子(京都新聞出版センター) 596</p> <p>パパの家庭進出がニッポンを変えるのだ! 前田晃平(光文社) 599</p> <p>＜産業＞</p> <p>森林の放射線生態学 橋本昌司(丸善出版) 653</p> <p>＜芸術＞</p> <p>失われた色を求めて 吉岡幸雄(岩波書店) 753</p> <p>社会思想としてのクラシック 猪木武徳(新潮社) 762</p> <p>演劇入門 鴻上尚史(集英社) 770</p> <p>＜言語＞</p> <p>ふくしまの子どもたち ゆめ・ぎぶん賞福島実行委員会(遊行社) 816</p> <p>エスペラント 大類善啓(批評社) 899</p> <p>＜文学＞</p> <p>歴史というもの 歴史というもの(中央公論新社) 911</p> <p>他者の靴を履く ブレイディみかこ(文藝春秋) 919</p> <p>感染症の時代と夏目漱石の文学 (かもがわ出版) 919</p> <p>万葉の鳥 山下景子(誠文堂新光社) 911</p> <p>顔のない花嫁 K・R・アレグザンダー(小学館) 93</p>
--	---

図書室のしるし

社会と個人の間にあるツインマン

14歳からの資本主義/個人主義を考える

お話 丸山俊一 (NHKエンタープライズ、東京藝術大学、早稲田大学)

昨今、資本主義をめぐる議論が盛んです。格差、分断が社会問題となり、世の中は複雑化・不透明感が増しています。多様性が叫ばれながらも同調圧力は変わらずに存在し、その一方で、個性が求められ、楽しいはずのSNSも苦痛になって日常的に疲れを感じている……そんな方も少なくはないのではないでしょうか。

この社会のあり方、そしてその中で一人の個人として生きていくことについて、改めて考えてみます。エグゼクティブプロデューサーとして異色の教養番組の企画制作を続ける丸山さんと、この時代やこの社会で心を開放する「生き方」「考え方」について考えてみませんか？

＜丸山さんの本＞『14歳からの資本主義』『14歳からの個人主義』(大和書房)『欲望の資本主義5』(東洋経済新報社 制作班との共著) ほか多数。

とき 3月5日(土) 昼2時〜4時

ところ 公民館 地下ホール

定員 40名(申込先着順)

申込 2月8日(火)朝9時〜

公民館 ☎(572)5141



\*発熱や体調の悪い方は、参加をご遠慮ください。  
また、マスクの着用をお願いします。

図書室のしごと

山に生かせる

—失われゆく山暮らし、山仕事の記録—

お話 三宅岳(フリー写真家)

山。そこに生きた人々のことを、私たちはどれだけ思い起こすことができるでしょうか。

山国と呼ばれるこの国の、谷を越え山壁を分けいったその奥のまた奥に、見事なまでの暮らしがあり、あまた数多の仕事があったことを、現在どれだけの人が想像できるでしょうか。

三宅さんが全国各地で巡り会ってきた、山や木をめぐる多様な仕事について、お話しいただきます。

『三宅さんの本』表題作(山と溪谷社)『炭焼紀行』(創森社)、『槍ヶ岳・穂高岳』調査執筆(昭文社)、『丹沢』(山と溪谷社)、『雲ノ平・双六岳を歩く』写真・文(山と溪谷社)ほか

とき 3月26日(土) 昼2時〜4時

ところ 公民館 地下ホール

定員 会場受講40名・オンライン受講30名 ※いずれも申込先着順

申込 2月17日(木)朝9時〜3月24日(木)夕5時

会場受講：公民館(572)5141

オンライン受講：sec\_kominkan@city.kunitachi.lg.jp



講八  
受ル項  
メー目  
ラン記  
オン載  
申込す  
記載す

【件名】講座名【本文】①氏名②ふりがな③住所④電話番号  
※参加方法の詳細は、前日までにメールいたします。  
※当日、参加者側の環境での接続や音声・映像の不備についての  
お問い合わせに関しては、対応することができませんので、  
あらかじめご了承ください。

〈私の本棚から 第5回〉

山本ゆり 著

『スターバックスで

普通のコーヒーを

頼む人を尊敬する件

syunkon diary



中井 あつし

今回紹介するのは大阪府出身の料理コラムニスト山本ゆりさんの、人気ブログを単行本化したエッセイ集です。

この本の一番の魅力は、本を読むというより、カフェでランチしながら、関西系女子との爆笑トークを楽しんでいるような時間が過ごせることです。そしてその中に出てきた料理やスイーツのレシピを枠外コラムに簡単に掲載してあったり、まとめてカラー写真付きで詳しく紹介するページもあります。

山本ゆりさんのレシピの特徴は、焼肉のたれとか麵つゆといった家庭に常備されている調味料を使って、フライパン一本とか電子レンジで手軽に作れることです。「出汁をひいて、何時間も煮込んでください」とか一切言わないので、料理に対するハードルが上がることなく作ることができます。

本書タイトルのスターバックス(あまり行かないのでスタバと略すのは恥ずかしいそうです)の話は四頁だけで、日常の会話や話題が主体です。「ティーバッグって一回で捨てますか?」といった自虐系のネタをはじめ、夫の

言「今日カレーでいいよ」が腑に落ちない」

(カレーを簡単な料理だと思っているかもしれないけど、切ったり煮込んだり手間がかかるんだぞ。簡単でいいと言うのなら、具は要らないからルーだけでいいとか、ボンカレーでいいとか言え)、「自分ばっかり損していると思う時に」など、読みながら大いに共感することもたびたびです。

「食べてないと落ち着かない状態の時ってよくあります。『空腹だから食べる』じゃなくて、『食べるという行為がしたいから食べる』って感じ」で「満腹感が欲しいんじゃない!満足感が欲しいんです!」と言って、つまみ食いや間食を頻繁にする姿に私は思わず拍手を送ってしまいました。

さらに、山本さんのご家族や友人たちとの爆笑トークのなかでは、みごとに一人ボケツコミありで関西系女子のトーク力の高さをふんだんに発揮しています。

この本を一冊読み終わった時には、「自分、めっちゃ関西弁になっとるやん!」となること請け合いです。(扶桑社)



係から

図書室の蔵書点検に伴う休室にご理解・ご協力をいただき、ありがとうございます。作家と作品など2月も様々な講座を予定しております。講座の前後にぜひ図書室で関連図書などを手に取ってご覧ください。